

アメリカ西部の自然系博物館を訪ねて

10月にアメリカ合衆国西海岸の自然系博物館とユタ州の恐竜産地を訪ねる機会を得たので、紹介したいと思います。



図1 ロサンゼルス郡立自然史博物館。左奥が本館、右手前が旧館の建物。

ロサンゼルス郡立自然史博物館

Natural History Museum of Los Angeles County(図1):ロサンゼルス中心部に近く、サイエンス・センターやローズガーデンに隣接しています。エントランスにはティラノサウルス *Tyrannosaurus* とトリケラトプス *Triceratops* があり、恐竜ホールにはティラノサウルスが3体も展示されています。これらは約2歳(全長3.3m)、約13歳(同6m)、約17歳(同10m)と推定されており、その成長の速さがうかがえます。このような展示は世界でもここだけでしょう。哺乳類展示室2階のバルコニーにはネオパラドキシア *Neoparadoxia* の復元骨格があり、タッチパネル形式で骨を発掘したり、それをはめ込んで骨格を復元したりする体験ができます。建物の周囲はミニ植物園になっていました。堆肥のできかけ3段階を手で掘らせてみたり、セージの葉に触ってにおいをかぐように促す看板があったり、体験の仕掛けがたくさんありました。



図2 タール池にはまったコロンビアマムモス(模型)。奥がページ博物館。

ページ博物館

George C. Page Museum: ロサンゼルス中心部からやや西側にあり、付近にはア

スファルトのにおいが…左の池にゾウの模型があり、「あ、これがタール・ピット」と納得しました(図2)。ここは周辺(ランチョ・ラ・ブレア)のタール・ピットから産出した化石専門の博物館です。展示室は広くないのですが、コロンビアマムモス *Mammuthus columbi* をはじめたくさんの化石があります。いずれも保存が良く、焦げ茶色で渋い光沢があります。圧巻はダイアウルフ *Canis dirus* の頭骨が何百個もかけられたオレンジ色の壁。クリーニング作業は岩石から取り出すとは異なり、固まったタールを薬品で除去する作業です。触れる化石は、しっとりした感触でした。このタール自体は中新世の生物が起源、化石はおよそ4万年前から数千年前のものだそうです。

この博物館があるハンコック公園内にはタールの池があちこちにあり、数カ所で発掘が行われていました。数立方メートルのブロック状に切り出されたものがいくつも置かれています。掘り下げた部分ではタールがしみ出しており、くみ上げながら作業が行われるようです。



図3 展示館。ボーンベッドの露頭に建物がかぶせてある。



図4 化石の小径にあるモリソン層の竜脚類の大腿骨(輪郭強調)。層理面を延長すると左奥の展示館の露頭につながる。

国立恐竜公園

Dinosaurs National Monument: ユタ州とコロラド州にまたがる広大な公園ですが、

今回訪ねたのは展示館(図3)と隣接する化石の小径 Fossil Discovery Trail(図4)だけです。展示館に入ると後ろ向きのアロサウルス *Allosaurs* が足跡とともにお出迎え。そして右には大露頭が! 子どもの頃から図鑑で見ていたあの bone bed(骨化石密集層)! いつか見たいと夢見ていたのでした。しばらく眺めてから2階のバルコニーへ移動し、単眼鏡で観察しました。ふと業務を思い出し、写真を撮りました。これらは企画展「恐竜の玉手箱」(22ページ参照)で展示します。ここではステゴサウルス *Stegosaurus* とカマラサウルス *Camarasaurus* が多いことやその位置をタッチパネル上で解説しています。その後外へ出て化石の小径を歩きました。そこではスタンプ層、モリソン層(展示館の地層)、モウリー層を観察できると説明されています。すぐに終わってしまい地層の薄さに驚きました。有名な地層だから厚いという訳ではないし、厚さも均一ではないのですが、もっと厚い思い込んでいました。展示館内の地層に比べると、化石は少ないのですが、ちょっと見ただけで恐竜の骨片が見つかるし、四肢骨や椎骨も見つかります。恐竜だらけで、独り大興奮! でした。



図5 ユタ州立公園自然史博物館のユタラプトル復元模型。他にもたくさんある。

ユタ州立公園自然史博物館

Utah Field House of Natural History State Park Museum: バーナルという町にあり、綺麗な新しい展示室でした。特に“Driving through the Ages”は先カンブリア紀一始新世80マイル(約130km)を自動車で行こうという、“のりじお”発想(友の会通信17巻3号参照)の展示が壁に大きく書かれていたのが印象的でし

た。展示では、恐竜よりむしろ哺乳類のコレクションが、すばらしい質でした。収蔵庫とラボをこれから増築する計画が貼り出されていました。庭の恐竜模型(図5)は、なくてもよいと思いました。



図6 ユタ大学自然史博物館。背後の山へつながる傾斜地を利用した建物。

ユタ大学自然史博物館

Natural History Museum, University of Utah : ソルトレイクシティにある博物館で、2013年に建物がエコロジー賞を受賞したそうです(図6)。傾斜地に建てられた階段状の建物で、展示室も階段状に配置され、スロープや階段を上りながら見学します。吹き抜けになったエントランスの壁にはインスタレーションが施されて、美的にも優れています。

展示では、恐竜の豊富さ、復元骨格の動き、組み合わせなど、古生物展示がとても良くてきていました。収蔵庫はガラス窓で公開されており、たくさんの恐竜化石が収蔵されていました。庫内の照明が消せないで退色しない化石が適しているのでしょう。また、DNA展示コーナーは二重らせんで取り巻かれた外観も良いし、その一部を利用した遺伝情報転写パズルもあり、楽しい展示だと感じました。



図7 ゴールデンゲート公園に建つカリフォルニア科学アカデミー。かなり凝ったエコロジカル・デザイン。

カリフォルニア科学アカデミー

California Academy of Science : ゴールデンゲート公園の中にあり、水族館、植物温室、プラネタリウム、自然史博物館からなる複合研究普及機関です。エ



図8 図7の右上口部分の拡大。丸窓は館内の熱帯雨林スフィア(球体)の採光部になっている。

コロジカルな建築で、緑化された“The Living Roof”の面積はおよそ18,000 m²、その周囲にはびっしりとソーラーパネルが貼られています(図7)。この屋根に出っ張ったマウンドは、一つはプラネタリウムの天井で、もう一つは球体の熱帯雨林展示室の天井です(図8)。中に入るとここでもティラノサウルス展示されていますが、空間が大きすぎて小さく見えます。右側には床に池があり、その先に天井から光が差し込む、透明な球体が見えます。熱帯雨林の温室です。左側には不透明な球体があり、こちらはプラネタリウムです。

温室に入るとチョウや小鳥が飛び交い、下には深い池があり大きな魚が泳いでいます。らせん状の通路を上まで登ると今度はガラス張りエレベーターで、一気に地下へ。そこ(底)はアマゾンの水槽で、水族館部分の入口です。そして、メタリック・ブルーの波形壁に水槽がはまった、水族館本体へと続きます。この展開はとてもドラマチックで、感動的です。

アシカの頭骨で壁一面が埋められた特別展示 Skull(頭骨)は収蔵標本の豊富さをみせつけられました。変わったところではサンフランシスコ地震を体験できる部屋や、地震から身を守るための方法をレクチャーする展示がありました。



図9 Pire 15(15番橋)1本全部を占めるエクスペラトリウム。

探検館(エクスペラトリウム)

Exploratorium : ハンズオン展示関係者



図10 ジャングルジムの穴あき木製遊具。まるでフナクイムシになったよう。



図11 ゴールデンゲート・ブリッジにあったエクスペラトリウム提供の実験装置。吊り橋の塔が高いほど張力が弱くてすむ。

には有名です。昨年、サンフランシスコ中心に近いPire 15に移転してきたそうです(図9)。栈橋1本が全部体験型展示室で、様々な体験用器具、演示コーナーが置かれています(図10)。自然系では、ラットの死体が骨になるまでの経過を、1週毎に5週分ライブ展示したケースや、展示ケースに収めた生態系を短焦点の望遠鏡で観察するものがありました。

ゴールデンゲート・ブリッジにも、このエクスペラトリウムが提供した橋の模型が設置されていました(図11)。

今回のアメリカ各館訪問で感じたことは、次のようにまとめられます。①博物館にリノベーションの波が来ている。②大規模なリノベーションではエコロジカルな建物、立体的な構成の展示が造られている。③大型のタッチパネルを使った解説、スマートフォンを使った個別の解説が採用されている。④科学館では誰も説明しないが、博物館では解説員がいる。

私がしてきた経験をなるべく多くの方と共有し、今後の博物館活動に活かしていきたいと思います。

註1 : 本記事中の日本語の館名称・施設名称は、著者による和訳です。

註2 : 科学研究費 課題番号 20605018(研究代表者 大島光春)を使用しました。